

生研 ニュース

PHOTO 重田琢也



IIS NEWS
No.130
2011.6

●上段左から

国際交流チームリーダー
佐藤 寿

研究総務チームリーダー
中村 正俊

執行チームリーダー
大木 義之

人事・厚生チームリーダー
大塚 浩一

事務部長
鈴木 敏人

総務・広報チームリーダー
尾迫 雅英

図書チームリーダー
河村 扶美

企画チームリーダー
岡野 孝之

財務・監査チームリーダー
松本 武彦

予算執行チームリーダー
部 正規

IIS
TODAY

この4月より本所に着任された鈴木敏人事務部長を中心に、事務部門のチームリーダーが勢揃いして下さいました。「生研の良いところは、先生方との距離がとても近いことです」と鈴木新事務部長。確かに本所の2階に集約された事務室は、教員にとっても大変アクセスしやすく、ちょっとした相談でももちこめるような和やかな雰囲気になっています。また「生研の事務組織の特徴は、職員同士の距離が近いので、所全体が一緒の目標を持って動けるところです」とのこと。いつも共同

研究や出張などの手続きを敏活に行って下さる様子からも、その一体感は伝わってくるのですが、チーム制という本所独特の仕組みも、その理由のひとつになっているようです。

震災を受け、一層の安全管理、夏に向けた節電計画など、本所も多くの課題に直面しています。「生研ならではのチームワークを活かし、この局面を乗り切りたいと思います」という鈴木事務部長の抱負に心強さを感じました。

(太田 浩史)

第3回生研産学共同研究の歴史を振り返る懇談会 (生研アーカイバル懇談会)「60年間に跨る第二工学部/ 東大生研での塑性加工研究」開催

去る2月23日(水)、「60年間に跨る第二工学部／東大生研での塑性加工研究」をテーマに、第3回生研産学共同研究の歴史を振り返る懇談会(生研アーカイバル懇談会)が旧六本木キャンパス跡地に建つ政策研究大学院大学内会議室において開催されました。所外から、木内學氏(木内研究室代表、東大名誉教授)、美坂佳助氏(エア・ウオー

ター株式会社相談役)、鎌田正誠氏(株式会社日本鋼管社友)、雪竹泰三氏(カルソニックハリソン株式会社元社長)、中田勉氏(株式会社中田製作所社長)、所内からは、野城智也所長、藤田博之副所長、柳本潤教授(本懇談会幹事)、藤井輝夫教授(企画運営室)、岡部徹教授(広報委員会)、佐藤が出席し、本所において進められた塑性加工研究

を例に、産学間の共同研究のあるべき姿や、その成功のために留意しなければならない点について、大変活発な議論が交わされました。詳細は「生産研究」2011年7月号に懇談会の様子をまとめた記事が掲載される予定ですのでそちらをご覧ください。

(企画運営室 佐藤 洋一)



生研オムニバスレクチャーの開催 「東日本大震災をどのように理解するか、いまなにをなすべきか」

4月8日（金）14時よりAn棟コンベンションホールにて、生研オムニバスレクチャーが開催され、直前のアナウンスにも関わらず、200名を越える多数の出席があった。本行事は、東日本大震災の発生を受けて、工学の研究所として生研は、いま何をなすべきか、今後どのようなアクションをとるべきか、といったことに加えて、直近の課題となる研究継続性をどのように担保するかについて、可能な範囲で情報交換と意識の共有をはかることを目的としたものである。ご存じのように生研は工学における広い範囲の専門分野をカバーする研究所であるため、様々な専門的立場からの情報や見解を一同

に集めることができる。実際に今回は、震源と津波に関する情報提供（浦教授）に始まり、地震による建物の被害状況（腰原准教授）、交通インフラの被害状況（牧野准教授）、電力プラントの被害状況（橋本特任教授）等の速報的な話題提供に加えて、放射線概論（福谷教授）、原子力レアメタル（岡部教授）、水への影響（沖教授）、さらにはエネルギー利用状況（池上特任助教）に関する解説が行われた。今回の震災は、未曾有の規模であるのみならず、その影響が及ぶ範囲もきわめて広いが、これだけ幅広いトピックをカバーできるのは、まさに生研ならではの、である。また、最後に藤

田副所長から、とりわけエネルギー事情の先行きが不透明な中で、どのようにして研究活動を継続してゆくべきか、その方策に関する見通しが述べられ、実験に没頭することも大事だが、深く考え、議論する時間を増やすことも重要ではないか、といった問いかけがあった。難事に臨んでも、研究所としての使命を果たすべく、構成員全員で「いまなにをなすべきか」をオープンに議論する契機となることを期待したい。

（平成22年度企画運営室長

藤井 輝夫）



技術フォーラム「いま何をなすべきか —東日本大震災からの復興のために—」開催される

4月25日（月）に本所主催の標記フォーラムが開催された。本年3月11日（金）に発生した東北地方太平洋沖地震による被害は多岐にわたり、その途方もない被害状況の全容ははまだ明らかになっていない。本フォーラムでは、野城所長が開会あいさつで「大震災と生研の役割」について概説された後、本所の教員が関わった多方面にわたる被害調査・復旧活動の概要を各講師が報告

した。これらの報告中では、「これだけの規模の震災でありながら頑健性を発揮し問題がおきなかった事例」も併せて紹介することで、私たちが東日本大震災から何を教訓として学び、今後の復興のためにいま何をなすべきかについての議論がそれぞれの専門の立場から展開された。最後に、藤田副所長が閉会あいさつとして、「復興のためいかに工学研究を継続していくか」についての生研としての決

意を表明され、盛況のもとにフォーラムが終了した。

当日は、一般191名、外国人25名、マスコミ関係19名と200名を超える参加者があり、主会場であるAn棟コンベンションホールでの日本語による講演に加えて、外国人参加者のために、隣接するハワイエをサテライト会場として利用した英語による同時通訳も行われた。

（企画運営室長 古関 潤一）



生研・医科研・分生研からなる「疾患分子工学」研究連携ユニット・発足記念講演会、開かれる

5月16日(月)に「疾患分子工学」連携研究ユニットが発足し、本所コンベンションホールにて発足記念講演会と懇談会が開催された。「連携研究ユニット」とは、総長室総括委員会の下の「総括プロジェクト機構」に位置づけられる組織で、教員のボトムアップ的な発意に基づき申請し、それを総括プロジェクト機構が承認し成立する。本「疾患分子工学」連携研究ユニットは、2011年1月11日に15番目に承認された全学で最も新しいものである。本ユニットは「バイオ分子工学」と「培養ヒト組織モデル」を当面の2つの柱に据えながら、臨床指向の医療工学を目指している。附置研間での連携はこれまで多数議論されてきたが、公式には初の組織となる。

当日は、三研究所および外部から60名近くの参加者を得た。ユニット長の畑中研一本所教授(物質・環境系部門)によるユニット紹介に引き続き、前田正史理事・副学長の挨拶、野城智也本所所長、清野宏医科研新所長、秋山徹分生研所長による挨拶と研究所の紹介が行われた。講演の部では、分生研からは渡辺嘉典教授による「染色体の分配機構」、清野所長自らによる「感染予防に向けた医工農融合型経口ワクチン」、本所からは合原一幸教授による「数理解モデルに基づくテラメド前立腺癌ホルモン療法」が行われた。講演終了後、ホール隣のホワイエにて懇談会が行われ、講演内容を中心とした様々な連携可能性が話し合われた。

今後は、研究所の自由度をフルに活かした多数の連携研究を着実に進めていくことが重要である。そのために、三研究所持ち回りでインフォーマルな意見交換会を積み重ね、折に触れて講演会を開催する予定である。「臨床指向の医療工学」の実例提示を目指し、学内外・産業界からのご意見やご支援をいただきたいと考えている。ご興味のある方は、それぞれ三研究所の連携窓口の教員にご連絡をいただきたい。

(物質・環境系部門 酒井 康行)
(詳しい紹介はホームページをご参照下さい。http://www.biomoleng.iis.u-tokyo.ac.jp/ 2011.5. 現在)



前田正史理事・副学長



野城智也本所所長



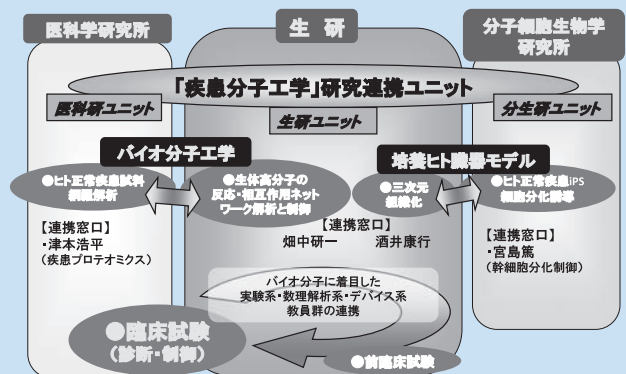
清野宏医科研所長



秋山徹分生研所長



畑中研一本所教授



—バイオ分子基盤かつ臨床指向の多部署連携研究ユニット—

生研記者会見報告

3月1日記者会見

細胞プリンター!? ～階層化された3次元細胞組織の自動形成に成功～

マイクロナノメカトロニクス国際研究センター
竹内 昌治准教授
松永 行子特任講師 発表
森本 雄矢大学院生

本所バイオナノ融合プロセス連携研究センターの竹内（昌）准教授らのグループは、細胞を自動的に配置するロボットを用いて、異種の細胞が階層的に配置された直方体やチューブ、リングなど様々な立体構造を高速に作製することに成功し

た。これまでの同グループが考案した、ビーズ状に加工した細胞組織を鋳型に流し込み任意の立体構造を作製する技術を、電子機材作製時に使う接着剤を自動で塗布するロボット（ディスペンサーロボット）と組み合わせた。

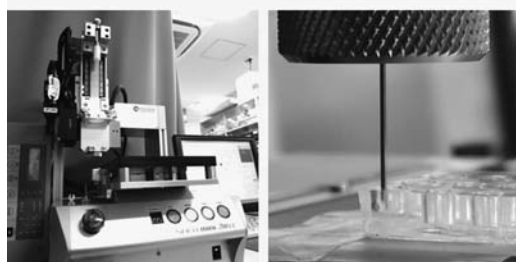
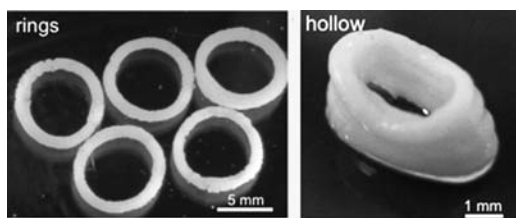
また、これを利用して、血管細胞や肝細胞、皮膚細胞などさまざまな種類の細胞を3次的に組み合わせた階層構造を高速で再現性良く作製することに成功した。

この技術によって、生体のように様々な種類の細胞が階層的に配置されている複雑な組織を立体形成できる可能性がでてきた。将来、動物実験を行わなくても



薬物に対する反応などを正確に調べることができる技術や、iPS細胞などの万能細胞を分化誘導後に立体構築することが必要な再生医療技術などへの応用が大きいと期待できる。本記者会見発表後に日経や産経、NHKなどで幅広く紹介された。

（バイオナノ融合プロセス連携研究センター BEANS プロジェクト 武田 宗久）



3月4日記者会見

理想の教育棟におけるゼロ・エネルギー・ビルの取り組み

人間・社会系部門
野城 智也教授 発表
大岡 龍三教授

3月4日（金）臨時記者会見を行い、駒場Iキャンパスに建てられた「理想の教育棟」におけるゼロ・エネルギー・ビルの取り組みについて発表した。会見には、本建築の省エネルギー化について担当した、本所、野城智也教授、大岡龍三教授、並びに永田敬総合文化研究科教授が臨んだ。ゼロ・エネルギー・ビルとは、「省エネルギー化を推進めるとともに一方で、太陽光発電などエネルギーを創る技術を導入し、年間での一次エネルギー消費量が正味でゼロ又は概ねゼロとなる建築物」と定義される。地球環境の重要性が増し、省エネルギー対

策が喫緊の課題である今日においてなくてはならない技術である。会見ではまず野城教授がゼロ・エネルギー・ビルを東大に導入することの必要性並びに経緯を述べ、次に永田教授がその教育施設としての役割を、最後に大岡教授が本建物に導入された個々の要素技術の解説を行った。また記

者会見の後は現地見学も執り行われた。
（人間・社会系部門 大岡龍三）



4月20日記者会見

ガン細胞中のビタミンCをバイオイメーキング! —電子スピンを利用したビタミンC検出用蛍光色素を開発—

物質・環境系部門
石井 和之准教授 発表
酒井 康行教授

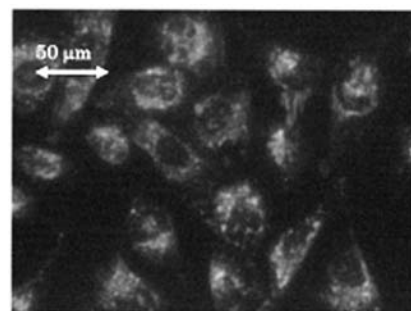
4月20日(水)、表記タイトルで記者会見が行われました。本研究成果は機能性色素の第一人者である石井准教授と生体システムの第一人者である酒井教授との合作です。

ビタミンCはご存じの通り、ヒトには必須の栄養素です。体内で生合成できない物質であるため、外部からの投与で賄っています。最近の研究で、ビタミンCの多量投与がガン治療に有効であるとされており、ますます注目されています。しかしながら、どういったメカニズムで抗ガン作用があるのか、ビタミンCの生体内挙動に関する知見はまったく掴めておりませんでした。

石井准教授らは、ビタミンCをガン細胞内で「光らせる」ことに成功しました。

蛍光法は高感度検出・非破壊の優れた分析法です。これまで、自身も光ることなく、ビタミンCを「光らせる」蛍光体は開発されておりました。これに対して、蛍光を阻害し、ビタミンCと反応する性質を併せ持つ安定有機ラジカル種(テトラメチルペリジノキシル: TEMPO)を蛍光色素へ結合させ、ビタミンCと反応した場合に蛍光強度増大が可能となったこと、リン脂質二重膜でこの複合体を保護し安定化させたこと、「赤く光る」フタロシアニン色素を利用したこと等により、ビタミンCを「赤く光らせる」ことに成功しました。赤色発光は生体組織を透過するため、とても良く見えるようになります。

この開発により、微小領域でのビタミン



Cのリアルタイム観察が可能となり、またガン細胞中でビタミンCを検出させることが可能となりました(上図)。光ファイバー等を用いて生体内のガン組織等を光らせマッピングしながらのビタミンC光診断も期待できるそうで、ビタミンCの生体内機能を明らかにするための重要な技術と考えられます。

(生研ニュース部会 小倉 賢)

NExT プログラムはじまります

急激な産業構造やビジネスモデルの変化のなかで、企業のエンジニアがこれまでに培ってきた技術だけでは対応できない状況が生じつつあります。社会状況と最新技術動向を俯瞰的に把握し、様々な技術を統合して新たな事業を創り出すような人材が現在求められています。このような社会情勢の中、我が国では、定式なき時代に自ら問題・課題を定義し、解決策を見いだしていくための訓練と勉学の機会が必ずしも十分とは言えません。新しい事業展開や融合的事業のスタートに向けて、新しい分野の学習、技術シーズの調査、異分野技術に関する洞察力の涵養など、企業のエンジニアが

新たな能力を会得するための教育的支援が喫緊の課題です。

本所は、工学のほぼ全分野を包括するとともに、学問分野間の垣根を取り払い、分野横断的な連携研究を推進しているユニークな研究所です。このような特徴を活かし、上述のような社会的要請に応えるため、「社会人新能力構築支援プログラム(New Expertise Training(NExT)プログラム)」をスタートします。詳しくは下記ホームページをご参照下さい。
<http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/next/>
(2011.5.現在)

現在、本年10月よりの第一期生受け入れに向けて鋭意準備を進めており、

5月11日(水)にはNExTプログラムについての記者会見を開催しました。また、駒場リサーチキャンパス公開期間中の6月3日(金)には、プログラム説明会を実施いたします。

本所構成員およびご関係の皆様には、本プログラムの趣旨を御理解頂き、積極的なご協力をお願いいたします。

(物質・環境系部門 火原 彰秀)



平成 23 年度大学院学生ガイダンス 及び歓迎懇親会開催される

平成 23 年度大学院学生ガイダンスが、4 月 20 日（水）に An 棟コンベンションホールで開催された。

15 時 30 分から所長の挨拶に始まり、地震の安全対策、ハラスメント、駒場学

生相談所、情報倫理、キャンパス案内、SNG 等についておよそ 2 時間のガイダンスが行われ、新入大学院生が熱心に耳を傾けていた。

ガイダンス終了後は懇親会が行われ、

所長や副所長、教員等を含め総計 322 名の参加者があり、終始活発な交流がはかられた。

（教育・学務委員長 志村 努）



ハラスメント相談所 矢野ゆき専門員



人間・社会系部門 岸研 酒井雄也さん



ICUS オープンレクチャー 「持続可能な都市システムの構築を目指して —ICUS の展望とアジアにおける役割—」

都市基盤安全工学国際研究センター (ICUS) は、4月21日 (木) 午後、An 棟コンベンションホールにて第20回 ICUS オープンレクチャー「持続可能な都市システムの構築を目指して—ICUS の展望とアジアにおける役割—」を開催した。ICUS は、2011年3月末に10年間の時限を迎え、2011年4月から新しくスタートした。今回は、今までの研究成果を振り返るとともに、国内外の専門家6名による第三者評価の結果を踏まえた将来構想を紹介した。

本年3月11日 (金) の「東北地方太平洋沖地震 (M9.0)」は広域に渡る津波・地震被害を引き起こし、未曾有の大災害となった。まず、目黒公郎セン

ター長が東日本大震災の緊急報告を行うとともに、ICUS の10年間の歩みと今後の体制を紹介した。新しい ICUS では、「災害安全社会実現学・国土環境安全情報工学・成熟社会基盤適応学」という3研究分野をコアとして、都市の安全性にかかわる諸課題の解決を目指している。これら3分野から、今までの成果と東日本大震災の復旧支援も含めた活動計画について報告が行われた。後半のパネルディスカッションでは、学外から天野玲子氏 (鹿島建設株式会社)、西川智氏 (国土交通省)、建石隆太郎氏 (千葉大学) をパネリストにお迎えし、東日本大震災を踏ま

えた今後の展望とアジアにおいて果たすべき役割について、総合討論を行った。当日は、160名を超える参加者があり、今後の ICUS へのますますの期待が感じられた。

(都市基盤安全工学国際研究センター
大原 美保)



「第6回生研サロン」開催される

2月21日 (月) 18時30分より An 棟カボ・ペカリーノにて、第6回目の生研サロンが、真冬にもかかわらず20名の教員・事務職員の参加のもと行われた。今回は、2010年度の生研元気タスクフォースによる議論から、国際環境経済学がご専門の本学農学部教授川島博之先生をお招きし、一次産業関連のトピックスを取り上げて頂いた。川島先生は、工学部で博士号を取得されたのちに本所に助手として勤務されたご経験をお持ちである。サロンでは、地球温暖化やBRICs国民の消費によって、食糧危機や水資源の危機が深刻に語られている話題が参加者一同の関心を誘った。原油価格の推移がほぼ横ばいなのに対し、食料価格が急上昇しているという事実は、食料生産にかかる費用が価格に

転嫁されているのではなく、国際的な食料市場に投機的なお金が流入していることの現れである、との主張が印象的であった。科学者が果たすべき役割は、客観的な分析に基づいた解釈であり、やたらと「食糧危機」をあおってはいけないし、それを助長するマスコミの論調にも振り回

されてはいけない、との持論を展開された。社会に密接かつ敏感な話題であるだけに、すべてをここに記載することはできないが、本所の在籍経験者らしい、熱のこもったご発表に、参加者一同は、オフレコならではのぎっくばらんな議論を満喫した。(企画運営室員 竹内 渉)



UROP 研究発表会

平成 22 年度冬学期の「学部学生のための研究入門コース Undergraduate Research Opportunity Program (UROP)」の研究発表会が、3月10日(木)に開催されました。UROPは、大島まり教授がコーディネーターとなり、教養の学部1、2年生を対象に、実際に大学院の研究室に所属して研究を体験してみようという全学自由研究ゼミナールです(詳しくはUROPのHP:[http://www.oshimalab.iis.u-tokyo.ac.jp/UROP/\(2011.5.現在\)](http://www.oshimalab.iis.u-tokyo.ac.jp/UROP/(2011.5.現在))を参照下さい)。本学期は5名の教養学部の1、2年生が、それぞれ本所の研究室に所属して、

約半年間、研究を行いました。

発表会当日は、受講生を指導した教員やスタッフ、先輩が駆けつけ、活発な質疑応答が行われました。高度な研究内容を、とても落ち着いた様子で発表しており、大学院生の発表と思われるほど素晴らしい発表ばかりでした。受講生にとって、自分が興味・関心を持ったテーマについて調査・研究を行い、まとめ、発表する過程は、非常に意義深いものになったと思います。

発表終了後は、懇談会を開催しました。実は、受講生たちは最初のガイダンス以降、この発表会が再会する唯一の

場であり、お互いの健闘を称え合うとともに、貴重な体験を共有する良い機会となったと思います。UROPでの経験が、受講生の大学生生活の選択肢をより広げることが願っています。

最後になりましたが、UROP関係者の皆様に感謝申し上げます。UROPでは、今後も受講生に「ナマの研究」体験の機会を提供していきたいと考えておりますので、皆様のご理解・ご協力のほどお願い申し上げます。

(機械・生体系部門 大島研究室
知の社会浸透ユニット 川越 至桜)

「UROP」研究発表会プログラム

	10:30-	開会挨拶・発表要領等の確認
1	10:35-10:50	物質・環境系部門 小倉研究室 潘 撼 ディーゼルすすの燃焼触媒のメカニズム解明
2	10:50-11:05	物質・環境系部門 立間研究室 朱 睿東 白金ナノ粒子担持酸化タンゲステン膜による酸化エネルギー貯蔵効率の最適化
3	11:05-11:20	物質・環境系部門 立間研究室 足立 精宏 酸化チタンの光触媒作用による金ナノ粒子の析出と光照射による酸化溶解の検討
4	11:20-11:35	物質・環境系部門 酒井(康)研究室 林 佑樹 メチルセルロースによる微小物質の凝集
5	11:35-11:50	基礎系部門 岡野・福谷研究室 王 青陽 レーザー誘起蛍光法によるHDの回転分光
	11:50-	講評、閉会挨拶、写真撮影、懇談会



VISITS

外国人研究者講演会

3月22日(火) 司会：助教 横井 喜充
 Prof. Arakel. S. PETROSYAN
 Space Research Institute of Russian Academy of Sciences, Russia
 SUBGRID-SCALE MODELING OF COMPRESSIBLE MHD FLOW

外国人客員研究員

氏名	国籍・所属	研究期間	受入研究室
CHOI, Don Hoon	アメリカ合衆国・カリフォルニア工科大学 准教授	2011. 4. 1~2012. 3.31	人間・社会系部門 村松研究室

外国人協力研究員

氏名	国籍・所属	研究期間	受入研究室
TETIK, Cigdem	トルコ・首相府災害緊急監督局・災害復旧部グループリーダー	2011. 6. 1~2011. 8.19	基礎系部門 小長井研究室

博士研究員

氏名	国籍	研究期間	受入研究室
POURBAKHT, Mojtaba	イラン	2011. 4. 1~2012. 3.31	人間・社会系部門 藤井(明)研究室
星 裕介	日本	2011. 4. 1~2012. 3.31	基礎系部門 町田研究室
PIERCONTI, Jong Kuk Mauro	イタリア	2011. 5. 1~2012. 4.30	人間・社会系部門 太田研究室

準博士研究員

氏名	国籍	研究期間	受入研究室
上村 一貴	日本	2011. 5. 1~2012. 3.31	人間・社会系部門 川口研究室
山本 義典	日本	2011. 6. 1~2012. 3.31	都市基盤安全工学国際研究センター 加藤(孝)研究室

東京大学特別研究員

氏名	国籍	研究期間	受入研究室
徳重 学	日本	2011. 4. 1~2012. 3.31	サステイナブル材料国際研究センター 岡部(徹)研究室
京川 裕之	日本	2011. 4. 1~2014. 3.31	基礎系部門 小長井研究室
下川 直史	日本	2011. 4. 1~2014. 3.31	基礎系部門 田中(肇)研究室
西本 一恵	日本	2011. 4. 1~2014. 3.31	基礎系部門 枝川研究室
武居 淳	日本	2011. 4. 1~2014. 3.31	マイクロナノメカトロニクス国際研究センター 藤田(博)研究室
DAMIRON, Denis	フランス	2011. 5.30~2013. 5.29	マイクロナノメカトロニクス国際研究センター 川勝研究室

PERSONNEL

人事異動

生産技術研究所 教員等

(退職)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 3.31	橋本 秀紀	辞職	教授 中央大学理工学部	准教授 附属先進モビリティ研究センター
23. 3.31	加藤 佳孝	辞職	准教授 東京理科大学理工学部	准教授 附属都市基盤安全工学国際研究センター
23. 3.31	西本 賢二	辞職	財団法人ベターリビング	助手 人間・社会系部門

(学内異動(入))

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 4. 1	川添 善行	昇任	講師 人間・社会系部門	助教 大学院工学系研究科

(所内異動)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 5. 1	清野 秀岳	配置換	助教 附属サステイナブル材料国際研究センター	助教 物質・環境系部門

PERSONNEL

(採用)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 4. 1	大口 敬	採用	教授 附属先進モビリティ研究センター	教授 首都大学東京大学院都市環境科学研究科
23. 4. 1	韓 榮培	採用	助教 機械・生体系部門	特任研究員 大学院工学系研究科
23. 5. 1	赤川 賢吾	採用	助教 物質・環境系部門	特任助教
23. 5. 1	信太 洋行	採用	助教 人間・社会系部門	特任助教

(任期付教員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 4. 1	畑中 研一	配置換	教授 物質・環境系部門生体分子工学分野	—
23. 4. 1	迫田 章義	配置換	教授 物質・環境系部門環境化学工学分野	—
23. 4. 1	喜連川 優	配置換	教授 附属戦略情報融合国際研究センターサイバー情報融合分野	—
23. 4. 1	沢田 治雄	配置換	教授 附属都市基盤安全工学国際研究センター国土環境安全情報学分野	教授 附属都市基盤安全工学国際研究センター都市基盤情報ダイナミクス分野

(所長・附属研究施設長)

発令年月日	氏名	異動内容	新兼務職名・兼務職名	旧兼務職名
23. 4. 1	藤田 博之	兼務	副所長	—
23. 4. 1	光田 好孝	兼務	副所長	—
23. 4. 1	須田 義大	兼務	附属千葉実験所長	—
23. 4. 1	喜連川 優	兼務	附属戦略情報融合国際研究センター長	—
23. 4. 1	金子 祥三	兼務	附属エネルギー工学連携研究センター副センター長	—
23. 4. 1	浦 環	兼務	附属海中工学国際研究センター長	—
23. 4. 1	須田 義大	兼務	附属先進モビリティ研究センター長	—
23. 4. 1	目黒 公郎	兼務	附属都市基盤安全工学国際研究センター長	—

(休職)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 3. 24	小田 克郎	休職更新	准教授 物質・環境系部門	—

(兼任教員)

発令年月日	氏名	異動内容	兼務職名・所属	本務職名・所属
23. 4. 1	村松 伸	兼任	教授 人間・社会系部門	大学共同利用機関法人総合地球環境学研究所研究部教授
23. 4. 1	桑原 雅夫	兼任	教授 附属先進モビリティ研究センター	国立大学法人東北大学大学院情報科学研究科教授

(兼務教員)

発令年月日	氏名	異動内容	兼務職名・所属	本務職名・所属
23. 4. 1	大島 まり	兼務	教授 機械・生体系部門	教授 大学院情報学環
23. 4. 1	池内 克史	兼務	教授 附属先進モビリティ研究センター	教授 大学院情報学環
23. 4. 1	年吉 洋	兼務	教授 附属マイクロナノメカトロニクス国際研究センター	教授 先端科学技術研究センター
23. 4. 1	瀬崎 薫	兼務	教授 情報・エレクトロニクス系部門	教授 空間情報科学研究センター
23. 4. 1	高宮 真	兼務	准教授 情報・エレクトロニクス系部門	准教授 大規模集積システム設計教育研究センター
23. 4. 1	根本 利弘	兼務	准教授 情報・エレクトロニクス系部門	准教授 地球観測データ統融合連携研究機構
23. 4. 1	前田 正史	兼務	教授 附属サステイナブル材料国際研究センター	理事・副学長
23. 4. 1	尾張 真則	兼務	教授 物質・環境系部門	教授 環境安全研究センター
23. 4. 1	柴崎 亮介	兼務	教授 人間・社会系部門	教授 空間情報科学研究センター
23. 4. 1	大原 美保	兼務	准教授 附属都市基盤安全工学国際研究センター	准教授 大学院情報学環
23. 4. 1	芳村 圭	兼務	准教授 人間・社会系部門	准教授 大気海洋研究所

発令年月日	氏名	異動内容	兼務職名・所属	本務職名・所属
23. 4. 1	中野 公彦	兼務	准教授 附属先進モビリティ研究センター	准教授 大学院情報学環
23. 4. 1	目黒 公郎	兼務	教授 附属都市基盤安全工学国際研究センター	教授 大学院情報学環
23. 4. 1	TIXIER EPOUSE MITA AGNES LAURE MARIE BEATRICE	兼務	准教授 附属マイクロナノメカトロニクス国際研究センター	准教授 先端科学技術研究センター
23. 4. 1	上條 俊介	兼務	准教授 附属戦略情報融合国際研究センター	准教授 大学院情報学環
23. 4. 1	吉川 健	兼務	准教授 附属サステイナブル材料国際研究センター	准教授 環境安全研究センター
23. 4. 1	佐藤 光三	兼務	教授 附属エネルギー工学連携研究センター	教授 大学院工学系研究科
23. 4. 1	堂免 一成	兼務	教授 附属エネルギー工学連携研究センター	教授 大学院工学系研究科
23. 4. 1	田中 知	兼務	教授 附属エネルギー工学連携研究センター	教授 大学院工学系研究科
23. 4. 1	藤井 康正	兼務	教授 附属エネルギー工学連携研究センター	教授 大学院工学系研究科
23. 4. 1	菊地 隆司	兼務	准教授 附属エネルギー工学連携研究センター	准教授 大学院工学系研究科
23. 4. 1	日高 邦彦	兼務	教授 附属エネルギー工学連携研究センター	教授 大学院工学系研究科
23. 4. 1	原 祥太郎	兼務	特任講師	特任講師 大学院工学系研究科

(客員部門)

発令年月日	氏名	異動内容	職名・所属	本務職名・所属
23. 4. 1	CHUNG, Edward	委嘱 称号付与	講師 (客員教授) 附属先進モビリティ研究センター	—
23. 4. 1	高田 章	委嘱 称号付与	講師 (客員教授) 高次協調モデリング部門	—
23. 4. 1	許 正憲	委嘱 称号付与	講師 (客員教授) 附属海中工学国際研究センター	—
23. 4. 1	小高 俊彦	委嘱 称号付与	講師 (客員教授) 附属戦略情報融合国際研究センター	—
23. 4. 1	横田 弘	委嘱 称号付与	講師 (客員教授) 附属都市基盤安全工学国際研究センター	—
23. 4. 1	市橋 康吉	委嘱 称号付与	講師 (客員教授) 附属都市基盤安全工学国際研究センター	—
23. 4. 1	澤田 賢治	委嘱 称号付与	講師 (客員教授) 附属サステイナブル材料国際研究センター	—
23. 4. 1	富山 哲男	委嘱 称号付与	講師 (客員教授) 人間・社会系部門	—
23. 4. 1	田中 敏久	委嘱 称号付与	講師 (客員教授) 附属先進モビリティ研究センター	—
23. 4. 1	塚本 修	委嘱 称号付与	教授 附属先進モビリティ研究センター	—
23. 4. 1	藤田 明博	委嘱 称号付与	教授 附属先進モビリティ研究センター	理事 理化学研究所
23. 4. 1	丸山 康樹	委嘱 称号付与	講師 (客員教授) 附属エネルギー工学連携研究センター	—
23. 4. 1	中村 崇	委嘱 称号付与	講師 (客員教授) 附属サステイナブル材料国際研究センター	—
23. 4. 1	大和田秀二	委嘱 称号付与	講師 (客員教授) 附属サステイナブル材料国際研究センター	—
23. 4. 1	山口 勉功	委嘱 称号付与	講師 (客員教授) 附属サステイナブル材料国際研究センター	—
23. 4. 1	柴山 敦	委嘱 称号付与	講師 (客員教授) 附属サステイナブル材料国際研究センター	—
23. 4. 1	鈴木 高宏	委嘱 称号付与	講師 (客員准教授) 附属先進モビリティ研究センター	—

PERSONNEL

発令年月日	氏名	異動内容	職名・所属	本務職名・所属
23. 4. 1	呉 光強	委嘱 称号付与	講師(客員教授) 機械・ 生体系部門	—
23. 4. 1	安達 淳	委嘱 称号付与	講師(客員教授) 附属 戦略情報融合国際研究セ ンター	—
23. 4. 1	陳 洛南	委嘱 称号付与	講師(客員教授) 最先 端数理モデル連携研究セ ンター	—

(寄付研究部門)

発令年月日	氏名	異動内容	職名・所属	本務職名・所属
23. 4. 1	黒田 和男	兼務	特任教授 ニコン光工学 寄付研究部門	教授 基礎系部門
23. 4. 1	須田 義大	兼務	特任教授 モビリティ・ フィールドサイエンス (タカラトミー)寄付研 究部門	教授 機械・生体系部門

(特任教員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 3. 20	川上 玲	任期満了	—	特任助教
23. 3. 31	IVANOV BORYS	任期満了	室長 ウクライナ科学ア カデミー-磁性研究所	特任教授
23. 3. 31	COLLARD DOMINIQUE	任期満了	特任教授(短時間)	特任教授
23. 3. 31	韓 軍	任期満了	特任准教授(短時間) / 技師長 株式会社アーク ・ジオ・サポート	特任准教授
23. 3. 31	久保田智広	任期満了	准教授 東北大学流体科 学研究所	特任講師
23. 3. 31	瀧ノ上正浩	任期満了	専任講師 東京工業大学 大学院総合理工学研究科	特任助教
23. 3. 31	阪野 貴彦	任期満了 (プロジェクト変更)	特任助教	特任助教
23. 3. 31	百瀬 健	任期満了	助教 大学院工学系研究 科	特任助教
23. 3. 31	小森 大輔	任期満了 (プロジェクト変更)	特任助教	特任助教
23. 4. 1	COLLARD DOMINIQUE	採用	特任教授(短時間)	特任教授
23. 4. 1	韓 軍	採用	特任准教授(短時間) / 技師長 株式会社アーク ・ジオ・サポート	特任准教授
23. 4. 1	興津 輝	採用	特任准教授	助教 京都大学医学部附 属病院
23. 4. 1	牧野 貴樹	採用	特任准教授	特任助教 総括プロジェ クト機構
23. 4. 1	小林 美加	採用	特任助教	特任助教(短時間)
23. 4. 1	守谷 頼	採用	特任助教	特任助教(短時間)
23. 4. 1	阪野 貴彦	採用 (プロジェクト変更)	特任助教	特任助教
23. 4. 1	西川 功	採用	特任助教	東京大学大学院情報理工 学系研究科数理情報学専 攻博士課程
23. 4. 1	松川 徹	採用	特任助教	筑波大学大学院システ ム情報工学研究科コン ピュータサイエンス専攻 博士後期課程
23. 4. 1	BASHAR MD. KHAYRUL	任命	特任助教	特任研究員
23. 4. 1	井上 茂	採用	特任助教	特任助教(短時間)
23. 4. 1	小林 篤	採用	特任助教	特別研究員(PD) 日本 学術振興会
23. 4. 1	小森 大輔	採用 (プロジェクト変更)	特任助教	特任助教
23. 4. 30	御領 潤	任期満了	特任講師(短時間)	特任講師
23. 4. 30	松永 行子	任期満了	さきがけ研究員 科学技 術振興機構 / 特任講師 (短時間)	特任講師
23. 4. 30	劉 楽昌	辞職	ポスドク研究員 慶應義 塾大学理工学部	特任助教
23. 4. 30	赤川 賢吾	辞職	助教 物質・環境系部門	特任助教
23. 4. 30	信太 洋行	辞職	助教 人間・社会系部門	特任助教

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 5. 1	御領 潤	採用	特任講師(短時間)	特任講師
23. 5. 1	松永 行子	採用	特任講師(短時間)	特任講師

(特任研究員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 3. 31	中谷 武志	任期満了	技術研究副主任 海洋研 究開発機構	特任研究員
23. 3. 31	AZIZ MUHAMMAD	任期満了	—	特任研究員
23. 3. 31	TOMA MILAN	任期満了	特別研究員 理化学研究 所	特任研究員
23. 3. 31	金 秀炫	任期満了	特任研究員 大学院工学 系研究科	特任研究員
23. 3. 31	PROVIN CHRISTOPHE MAURICE ROGER	任期満了 (プロジェクト変更)	特任研究員	特任研究員
23. 3. 31	木村 祐史	任期満了	浜松ホトニクス株式会社	特任研究員
23. 3. 31	近藤 愛子	任期満了 (プロジェクト変更)	特任研究員	特任研究員
23. 3. 31	間山 憲仁	任期満了	産学協同研究員 東京工 業大学	特任研究員
23. 4. 1	LEOCMACH MATHIEU LAM SON OLIVIER	採用	特任研究員	東京大学大学院工学系研 究科物理工学専攻博士課 程
23. 4. 1	飯塚 宣行	採用	特任研究員	招聘研究員 宇宙航空研 究開発機構
23. 4. 1	小野 謙二	採用	特任研究員	チームリーダー 理化学 研究所知的財産戦略セン ター VCAD システム研 究プログラム機能情報シ ミュレーションチーム
23. 4. 1	小野 謙二	研修出向 開始	特任研究員	—
23. 4. 1	谷村 景貴	採用	特任研究員	学部教育研究協力員 お 茶の水女子大学
23. 4. 1	吉廣 保	採用	特任研究員	特任准教授 情報基盤セ ンター
23. 4. 1	上村 典子	育児休業 開始	特任研究員	—
23. 4. 1	PROVIN CHRISTOPHE MAURICE ROGER	採用 (プロジェクト変更)	特任研究員	特任研究員
23. 4. 1	岩永進太郎	採用	特任研究員	研究員 富山大学大学院 理工学研究部(工学)
23. 4. 1	近藤 愛子	採用 (プロジェクト変更)	特任研究員	特任研究員
23. 4. 1	関川 宗久	採用	特任研究員	研究員 科学技術振興機 構
23. 4. 1	守利 悟朗	採用	特任研究員	特任助教 地球観測デー タ統合連携研究機構
23. 4. 1	池田 裕一	採用	特任研究員	主任研究員(株)日立 製作所 日立研究所
23. 4. 8	MEHRAN BABAK	辞職	—	特任研究員
23. 4. 16	CHOWDHURY MOHAMMAD MAHFUZ	採用	特任研究員	—
23. 5. 1	大西 順也	採用	特任研究員	—
23. 5. 1	岩沢 ころ	採用	特任研究員	特定助教 京都大学大学 院医学研究科

(学術支援専門職員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 3. 31	佐藤美智代	任期満了	一般職員 東京大学	学術支援専門職員
23. 4. 1	高山 由貴	採用	学術支援専門職員	—

(学術支援職員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 3. 16	吉本 英子	採用	学術支援職員	事務補佐員

PERSONNEL

生産技術研究所 技術系

(退職)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 3.31	西村 次男	定年退職	—	技術専門員 人間・社会系部門
23. 3.31	滑川 敏夫	定年退職	—	技術専門員 試作工場
23. 3.31	平原 清光	定年退職	—	技術専門員 電子計算機室
23. 3.31	嶋崎 守	辞職	首都大学東京 東京都立産業技術高等専門学校 助教	技術専門職員 機械・生体系部門

(所内異動)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 4. 1	前橋 至	昇任	技術専門職員 リサーチ・マネジメント・オフィス	技術職員 リサーチ・マネジメント・オフィス

(再雇用)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 3.31	倉科満壽夫	再雇用 任期満了	—	再雇用教職員 映像技術室
23. 4. 1	滑川 敏夫	再雇用	再雇用教職員 試作工場	—
23. 4. 1	平原 清光	再雇用	再雇用教職員 電子計算機室	—
23. 4. 1	鶴 達郎	再雇用 任期更新	再雇用教職員 物質・環境系部門	—
23. 4. 1	小西 義幸	再雇用 任期更新	再雇用教職員 試作工場	—
23. 4. 1	小池 雅洋	再雇用 任期更新	再雇用教職員 人間・社会系部門	—
23. 4. 1	星野 富夫	再雇用 任期更新	再雇用教職員 人間・社会系部門	—
23. 4. 1	米良 忠久	再雇用 任期更新	再雇用教職員 試作工場	—
23. 4. 1	福尾 哲二	再雇用 任期更新	再雇用教職員 試作工場	—
23. 4. 1	鈴木 常夫	再雇用 任期更新	再雇用教職員 電子計算機室	—
23. 4. 1	高山 俊雄	再雇用 任期更新	再雇用教職員 物質・環境系部門	—
23. 4. 1	千原 正男	再雇用 任期更新	再雇用教職員 基礎系部門	—
23. 4. 1	鈴木 文博	再雇用 任期更新	再雇用教職員 機械・生体系部門	—
23. 4. 1	瀬川 茂樹	再雇用 任期更新	再雇用教職員 機械・生体系部門	—
23. 4. 1	小駒 幸江	再雇用 任期更新	再雇用教職員 人間・社会系部門	—
23. 4. 1	小野寺 章	再雇用 任期更新	再雇用教職員 試作工場	—

(休職)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 4. 7	飯塚 哲彦	休職更新	技術専門職員 情報・エレクトロニクス系部門	—

生産技術研究所 事務系

(退職)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 3.31	佐沼 繁治	定年退職	—	事務部長
23. 3.31	丸山 正子	定年退職	—	主任 経理課予算執行チーム
23. 4.30	添田 康平	辞職	—	一般職員 総務課総務・広報チーム

(学内異動 (出))

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 4. 1	稲垣 博明	昇任	事務部長 数物連携研究機構	経理課長/総務課研究環境調整室副室長
23. 4. 1	高橋 博行	配置換	副事務部長 東洋文化研究所	総務課副課長 (人事・厚生チーム) 人事・厚生チームリーダー
23. 4. 1	渡邊 一兄	配置換	副課長 医学部附属病院管理課 (総務・監査チームリーダー)	経理課副課長 連携研究支援室長

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 4. 1	吉川 誠	配置換	主査 教養学部等学生支援課 (厚生係長兼務)	総務課主査 (研究環境調整室安全衛生チーム) 安全衛生チームリーダー
23. 4. 1	清水 正一	配置換	係長 理学系研究科等総務課総務チーム	総務課係長 (国際交流チーム) 国際交流チームリーダー
23. 4. 1	朝比奈伸一	配置換	係長 社会科学研究所図書チーム	総務課係長 (図書チーム) 図書チームリーダー
23. 4. 1	佐々木 毅	配置換	係長 分子細胞生物学研究所財務会計チーム	経理課係長 (連携研究支援室企画チーム)
23. 4. 1	神 誠	配置換	プロジェクト経理係長 医学部研究所経理課	経理課係長 (連携研究支援室執行チーム) 執行チームサブリーダー
23. 4. 1	松本 康男	配置換	係長 資産管理部資産課資産経営チーム	経理課係長 (連携研究支援室執行チーム)
23. 4. 1	小高 裕一	配置換	一般職員 人事課企画課 (民間研修・新日鉄)	総務課一般職員 (人事・厚生チーム)
23. 4. 1	瀧田 麻由	配置換	一般職員 研究推進部外部資金課外部資金戦略チーム	経理課一般職員 (財務・監査チーム)
23. 4. 1	野田 純平	配置換	一般職員 総務部渉外・基金課	経理課一般職員 (連携研究支援室企画チーム)

(学内異動 (入))

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 4. 1	鈴木 敏人	昇任	事務部長	契約課長 財務部
23. 4. 1	見供 隆	昇任	経理課長/総務課研究環境調整室副室長	副課長 財務部財務課
23. 4. 1	大塚 浩一	配置換	総務課副課長 (人事・厚生チーム) 人事・厚生チームリーダー	副事務長 情報基盤センター
23. 4. 1	大木 義之	配置換	経理課主査 (連携研究支援室執行チーム) 執行チームリーダー	専門職員 財務部経理課
23. 4. 1	佐藤 寿	配置換	総務課係長 (国際交流チーム) 国際交流チームリーダー	係長 国際部国際企画課
23. 4. 1	河村 扶美	昇任	総務課係長 (図書チーム) 図書チームリーダー	主任 教養学部等図書課 数理学図書係
23. 4. 1	山田 哲史	配置換	経理課係長 (連携研究支援室企画チーム)	財務部財務課係長/専門職員 国立大学協会企画部
23. 4. 1	大平 智子	昇任	経理課係長 (連携研究支援室執行チーム)	主任 医学部研究所経理課財務係
23. 4. 1	石田 さよ	配置換	総務課主任 (総務・広報チーム)	主任 教養学部等総務課 数理学総務係
23. 4. 1	星 和光	配置換	経理課一般職員 (財務・監査チーム)	一般職員 総務部広報課 広報企画知チーム
23. 4. 1	赤池 真	配置換	経理課一般職員 (連携研究支援室企画チーム)	一般職員 工学系研究科等財務課 財務チーム
23. 4.15	加藤 牧子	配置換	総務課一般職員 (人事・厚生チーム)	一般職員 本部人材育成課

(復帰)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 4. 1	伊藤 晃	復帰	総務課係長 (研究総務チーム)	係長 国立新美術館庶務課庶務担当
23. 4. 1	青木 秀夫	復帰	経理課係長 (連携研究支援室執行チーム)	企画係長 国立大学財務・経営センター総務部 経営支援課
23. 4. 1	佐々木友明	復帰	経理課主任 (予算執行チーム)	主査 (一般職員相当) 科学技術振興機構科学技術振興調整費業務室

(臨時的採用)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 4. 1	豊田 登世	臨時的採用	総務課一般職員 (人事・厚生チーム)	一般職員 医学部附属病院総務課

(所内異動)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 4. 1	尾迫 雅英	配置換	総務課副課長 (総務・広報チーム) 総務・広報チームリーダー	総務課専門員 (総務・広報チーム) 総務・広報チームリーダー
23. 4. 1	高島 章寿	昇任	経理課副課長 連携研究支援室長	経理課主査 (連携研究支援室執行チーム) 執行チームリーダー

PERSONNEL

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 4. 1	伊熊 正則	昇任	総務課係長（研究環境調整室安全衛生チーム）	総務課主任（総務・広報チーム）
23. 4. 1	西野 敏成	昇任	経理課主任（財務・監査チーム）	経理課一般職員（財務・監査チーム）
23. 4. 1	水野 伸	命	総務課主査（研究環境調整室安全衛生チーム） 施設安全衛生チームリーダー	総務課主査（研究環境調整室施設チーム） 施設チームサブリーダー
23. 4. 1	永野 太	命	総務課係長（研究環境調整室施設チーム） 施設チームサブリーダー	総務課係長（研究環境調整室施設チーム）
23. 4. 1	田所 正裕	勤務命令	総務課一般職員（総務・広報チーム）	総務課一般職員（研究総務チーム）

(再雇用)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 4. 1	三井 伸子	再雇用 任期更新	再雇用教職員 総務課総務・広報チーム	—
23. 4. 1	三浦 孝樹	再雇用 任期更新	再雇用教職員 経理課予算執行チーム	—
23. 4. 1	林 美郷	再雇用 任期更新	再雇用教職員 千葉実験所事務室	—

(特任専門員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 4. 1	片桐 和子	採用	特任専門員 経理課	キャリアサポート課長 本部教育・学生支援部

(育児休業)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 4. 13	塩田このみ	育児休業 開始	一般職員 総務課人事・厚生チーム	—

地球観測データ統融合連携研究機構 教員等

(特任教員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 3. 31	生駒 栄司	任期満了 (プロジェクト変更)	特任准教授	特任准教授
23. 3. 31	王 磊	任期満了 (プロジェクト変更)	特任准教授	特任准教授
23. 3. 31	守利 悟朗	任期満了	特任研究員 生産技術研究所	特任助教
23. 4. 1	生駒 栄司	採用 (プロジェクト変更)	特任准教授	特任准教授
23. 4. 1	王 磊	採用 (プロジェクト変更)	特任准教授	特任准教授

(特任研究員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 3. 31	今田由紀子	任期満了	産学官連携研究員 東京工業大学	特任研究員

(特任専門員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 3. 31	合田 昭子	任期満了	特任専門員	特任専門員
23. 4. 1	合田 昭子	採用	特任専門員	特任専門員

ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構 教員等

(兼務教員)

発令年月日	氏名	異動内容	兼務職名・所属	本務職名・所属
23. 4. 1	荒川 泰彦	兼務	教授	教授 生産技術研究所
23. 4. 1	今井 浩	兼務	教授	教授 大学院情報理工学系研究科
23. 4. 1	大津 元一	兼務	教授	教授 大学院工学系研究科
23. 4. 1	勝本 信吾	兼務	教授	教授 物性研究所
23. 4. 1	五神 真	兼務	教授	教授 大学院工学系研究科
23. 4. 1	田中 雅明	兼務	教授	教授 大学院工学系研究科
23. 4. 1	樽茶 清悟	兼務	教授	教授 大学院工学系研究科

発令年月日	氏名	異動内容	兼務職名・所属	本務職名・所属
23. 4. 1	平川 一彦	兼務	教授	教授 生産技術研究所
23. 4. 1	平本 俊郎	兼務	教授	教授 生産技術研究所
23. 4. 1	古澤 明	兼務	教授	教授 大学院工学系研究科
23. 4. 1	山内 薫	兼務	教授	教授 大学院理学系研究科
23. 4. 1	染谷 隆夫	兼務	教授	教授 大学院工学系研究科
23. 4. 1	高橋 琢二	兼務	准教授	准教授 生産技術研究所
23. 4. 1	町田 友樹	兼務	准教授	准教授 生産技術研究所
23. 4. 1	村尾 美緒	兼務	准教授	准教授 大学院理学系研究科
23. 4. 1	岩本 敏	兼務	准教授	准教授 生産技術研究所
23. 4. 1	野村 政宏	兼務	准教授	准教授 生産技術研究所

(客員部門)

発令年月日	氏名	異動内容	職名・所属	本務職名・所属
23. 4. 1	野田 進	委嘱	教授	教授 京都大学工学研究科
23. 4. 1	田原 修一	委嘱 称号付与	講師 (客員教授)	—
23. 4. 1	高橋 明	委嘱 称号付与	講師 (客員教授)	—
23. 4. 1	矢野 映	委嘱 称号付与	講師 (客員教授)	—
23. 4. 1	竹内 繁樹	委嘱	教授	教授 北海道大学電子科学研究科
23. 4. 1	山本 喜久	委嘱	教授	教授 情報・システム研究機構国立情報学研究所
23. 4. 1	石田 寛人	委嘱 称号付与	講師 (客員教授)	—
23. 4. 1	武田 晴夫	委嘱 称号付与	講師 (客員教授)	—
23. 4. 1	菅原 充	委嘱 称号付与	講師 (客員教授)	—
23. 4. 1	北村 雅季	委嘱	准教授	准教授 神戸大学大学院工学研究科
23. 4. 1	中岡 俊裕	委嘱 称号付与	講師 (客員准教授)	—
23. 4. 1	小寺 哲夫	委嘱	助教	助教 東京工業大学量子ナノエレクトロニクス研究センター

(特任教員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 3. 31	有田 宗貴	任期満了	特任准教授	特任助教
23. 3. 31	田辺 克明	任期満了	特任准教授	特任助教
23. 4. 1	有田 宗貴	採用	特任准教授	特任助教
23. 4. 1	田辺 克明	採用	特任准教授	特任助教
23. 4. 1	太田 泰友	採用	特任助教	東京大学大学院工学系研究科電気系工学専攻博士課程
23. 4. 1	館林 潤	採用	特任助教	NIMS ポストドク研究員 物質・材料研究機構量子ドットセンター

(特任研究員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
23. 3. 31	CARDENAS NIETO JAIRO RICARDO	任期満了	—	特任研究員
23. 4. 16	HARBORD EDMUND GEORGE HEDLEY	採用	特任研究員	大和スカラー (特別奨学生) 大和日英基金

■着任のご挨拶

附属先進モビリティ研究センター
教授

大口 敬



4月1日付で着任いたしました。六本木時代の生研で5年間大学院生として生活し、その後自動車会社と公立大学に勤務しました。交通渋滞や交通信号制御、交通安全、交通環境影響に関わる研究を専門としています。想定外の大地震直後の着任となりましたが、ヒトモノのモビリティに関わる研究活動を通じて、新たな日本の安全・安心を実現する真に豊かで夢のある社会の実現に少しでも貢献できたらと考えております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

機械・生体系部門
特任准教授

興津 輝



この度、4月1日付で特任准教授に着任いたしました。私は、これまで組織移植医療であります髒島移植に従事して参りました。世界トップの専門家が集結している生産技術研究所での活動を通して、次世代の髒島移植ひいては組織移植医療の開発ならびに確立を目指したいと考えております。また、医学との橋渡しをすることで工学分野の発展に貢献できることを希望しております。ご指導の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

最先端数理モデル連携研究センター
特任准教授

牧野 貴樹



情報科学をベースにしてコミュニケーションのための数理システムの研究を行っています。機械学習という、モデルをもとにデータの傾向を分析・予測する分野のなかで、特に、試行錯誤を通して最適な行動手順を発見する強化学習理論と、データに応じてモデルの複雑度が自動的に調節されるノンパラメトリックベイズを融合させ、互いに他者のモデルを作りあうコミュニケーションのモデルを作ることで、ロボットやコンピュータがヒトと自然にやりとりできるような技術の基礎理論を実現することを目指しています。本研究の様々な分野の先生方と連携しながら、数理モデルを工学に活用していければ幸いです。よろしくお願い申し上げます。

人間・社会系部門
講師

川添 善行



4月1日に人間・社会系部門講師に着任いたしました。建築設計を専門としています。今、日本の風景は危機に直面しています。風景を育んできた生業、まちの構造、自然とのつきあい方、そのすべてが、おおきなゆさぶりを受けています。私たちの世代は、この文明の転換期に遭遇した意味を考え続けなくてはならないでしょう。私は、建築設計という視点から、この国の行く末、風景の将来、を考え、自分なりの行動をしてゆきたいと思っております。

事務部長

鈴木 敏人



4月1日付で財務部から着任いたしました。

着任前の3月11日に発生しました東日本大震災では、被災された方々におかれましての大きなご心労を深くお察し申し上げます。当研究所におきましても少なからず影響があったと存じておりますし、現在も電力等の関係から研究・教育活動に大きく影響していると認識しております。事務部といたしましてもスタッフ全員で当研究所の研究・教育活動が円滑に行われるよう取り組んでまいり所存でございますので、何卒、ご指導とご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

経理課長

見供 隆



4月1日付で経理課に着任いたしました。国内では3月11日に発生しました東北地方太平洋沖地震により、様々な支障が起きており、生産技術研究所においても節電対策や計画停電などの影響から、教育・研究活動が停滞し今後の活動に多大な影響を及ぼす状況となっております。経理課においても、通年にはない様々な業務が発生する中で、皆さんといっしょになって勉強しながら、前向きな姿勢で仕事をやっていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

PERSONNEL

採用



●機械・生体系部門
鹿園研究室 助教
韓 榮培



●物質・環境系部門
工藤研究室 助教
赤川 賢吾



●人間・社会系部門
野城研究室 助教
信太 洋行



●総務課一般職員(人事・
厚生チーム)
豊田 登世



●経理課特任専門員
片桐 和子

配置換



●総務課副課長
人事・厚生チームリーダー
大塚 浩一



●経理課主査(連携研究
支援室執行チーム)
執行チームリーダー
大木 義之



●総務課係長(国際交流
チーム)
国際交流チームリーダー
佐藤 寿



●経理課係長(連携研究
支援室企画チーム)
山田 哲史



●総務課主任(総務・
広報チーム)
石田 さよ



●総務課一般職員(人事・
厚生チーム)
加藤 牧子



●経理課一般職員(財務・
監査チーム)
星 和光



●経理課一般職員(連携
研究支援室企画チーム)
赤池 真

昇任



●総務課係長(図書チーム)
図書チームリーダー
河村 扶美



●経理課係長(連携研究
支援室執行チーム)
大平 智子



●総務課係長(研究総務
チーム)
伊藤 晃



●経理課係長(連携研究
支援室執行チーム)
青木 秀夫



●経理課主任(予算執行
チーム)
佐々木友明

復帰

貴方のつぶやきに、返事が来るかも!?

～投稿記事を募集しています!～

生研ニュースでは、読者の皆様のためのコーナーをいつでも用意しております。日常の生研生活を通じて気づいたちょっとしたこと、素敵だと思ったこと、「これは!」と思ったこと、などなど、気軽にお近くの生研ニュース部会員までお届け下さい。

他にも、ニュース部会員が気がついていない様々な情報や記事内容・企画などがありましたら、一言お声をおかけ下さい。

受け付けは常時行っています。思い立ったが吉日、奮ってご寄稿下さい。

なお、記事の採択については、生研ニュース部会にご一任願います。特定の個人や集団の利害に著しく関わるものについては、掲載できない場合もありますので、予めご了承下さい。その他、投稿についてご不明の点がありましたら、いつでもお問い合わせ下さい。

今年もいろいろな情報発信、記憶・記録の源としての役割を担ってほしいと、部会員一同気合いが入っています!

お問い合わせ・投稿先 E-mail iisnews@iis.u-tokyo.ac.jp
(生研ニュース部会長 小倉 賢)

A W A R D S

■受賞 教員

所属	職・氏名	受賞名・機関	受賞項目	受賞日
附属戦略情報融合国際研究センター	教授 喜連川 優 特任准教授 中野美由紀 特任助教 合田 和生 大学院生 早水 悠登	優秀インタラクティブ賞 第3回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム	Solid State Drive 搭載オンライントランザクション処理サーバにおける Dynamic Voltage and Frequency Scaling を用いた省電力化の実験的検討	2011. 3. 1
物質・環境系部門 追田研究室	技術専門員 藤井 隆夫	研究功労賞 (社)化学工学会	環境・化学工学分野における実験装置・実験手法の考案・改良による研究活動への長年の貢献	2011. 3.23
附属先進モビリティ研究センター	准教授 坂本 慎一	守田栄論文賞 (社)日本騒音制御工学会	高遮音性能を有するダクト型換気システムの開発	2011. 5.18

■受賞 学生

所属	職・氏名	受賞名・機関	受賞項目	受賞日
附属先進モビリティ研究センター 中野(公)研究室	修士課程2年 (平成23年3月修了) 岡本 裕司	大学院研究奨励賞 (社)自動車技術会	人の反応を利用した自動車及びシートの乗り心地評価	2011. 3. 1
附属戦略情報融合国際研究センター 喜連川研究室	修士課程2年 早水 悠登	情報処理学会第73回全国大会 学生奨励賞 (社)情報処理学会	オンライントランザクション処理におけるスループットを考慮したプロセッサ省電力手法の実験的考察	2011. 3. 4
附属先進モビリティ研究センター 中野(公)研究室	修士課程2年 (平成23年3月修了) 岡本 裕司	日本機械学会 若手優秀講演フェロー賞 (社)日本機械学会	自動車乗車時を模擬した振動に対する胸鎖乳突筋筋電位の応答	2011. 3.11
基礎系部門 酒井(啓)研究室	修士課程2年 石綿 友樹	第10回 田中昭二賞 (物理学優秀修士論文賞) 東京大学大学院工学系研究科物理学専攻	微小液滴の生成・飛翔制御と高速マイクロ物性測定	2011. 3.24
附属先進モビリティ研究センター 坂本研究室	修士課程2年 (平成23年3月修了) 鹿野 洋	工学系研究科長賞 (研究) 東京大学大学院工学系研究科	FDTD法における指向性合成を用いた室内音響解析	2011. 3.24

■受賞のことば

附属先進モビリティ研究センター
中野(公)研究室 修士課程2年
(平成23年3月修了) 岡本 裕司



大学院研究奨励賞
(社)自動車技術会
「人の反応を利用した自動車及びシートの乗り心地評価」

日本機械学会 若手優秀講演フェロー賞
(社)日本機械学会
「自動車乗車時を模擬した振動に対する胸鎖乳突筋筋電位の応答」

本研究は、自動車乗車時の乗員の頸部筋肉の筋電位を測定し、これを用いて新しい乗り心地の評価指標を提案することを目的としています。今回、このような賞をいただいたのも、決して私一人の力ではなく、多くの皆さまの支えがあったからです。指導教員の中野公彦准教授、トヨタ自動車株式会社の堀重之氏、須田研究室の須田義大教授、また研究生生活をともにした中野研究室の皆さまに、この場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

附属戦略情報融合国際研究センター
喜連川研究室 修士課程2年

早水 悠登



情報処理学会第73回全国大会
学生奨励賞
(社)情報処理学会

「オンライントランザクション処理におけるスループットを考慮したプロセッサ省電力手法の実験的考察」

この度の受賞をたいへん嬉しく思います。ご指導いただいた喜連川教授、中野(美)特任准教授、合田特任助教をはじめ研究室の皆さまに感謝いたします。本研究では、銀行やオンラインショッピングなどのサービスに用いられるデータベースシステムの省電力化を行いました。省電力化はシステムの性能を抑えることで達成できますが、これはサービスの質の低下を招きうるという問題があります。サービスの質が最低ラインを下回らないようリアルタイムに監視し省電力制御を行うことで、我々はこの問題の解決を図っています。

A W A R D S

基礎系部門
酒井(啓)研究室 修士課程2年

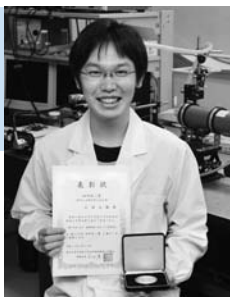
石綿 友樹

第10回 田中昭二賞

(物理工学優秀修士論文賞)

東京大学大学院工学系研究科物理
工学専攻

「微小液滴の生成・飛翔制御と高速マイクロ物性測定」



私は修士課程において、インクジェットを用いた微小液滴の生成法、制御法、評価法について研究しました。その成果を修士論文発表会において発表したところ、今回このようなすばらしい賞をいただき大変うれしく思います。頂いた賞は物理工学、物質工学において多大な功績を挙げた田中先生を称え創設された賞です。私はまだまだ若輩者ですが、この賞の名に恥じぬよう精進したいと思います。

附属先進モビリティ研究センター
坂本研究室 修士課程2年
(平成23年3月修了)

鹿野 洋

工学系研究科賞(研究)

東京大学大学院工学系研究科

「FDTD法における指向性合成を用いた室内音響解析」



このような賞をいただき、大変光栄に思っております。本研究では、生研の池内研究室のお力添えもいただき、このような成果を残すことができました。音響工学は、建築学、物理学、心理学などが絡み合う複合的な学問であり、専門の異なる多くの研究室が共存する生研の強みを活かし、本分野が今後更なる発展を遂げることを期待しています。

最後になりましたが、本研究を指導していただいた坂本慎一准教授、また支えていただいた研究室の皆様に、心より感謝申し上げます。

I N F O R M A T I O N

第7回駒場キャンパス

技術発表会発表者募集について

第7回駒場キャンパス技術発表会の発表者を募集いたします。技術職員が日常業務で携わっている実験装置やソフトウェアの開発、維持管理から改善、改良の話題に及ぶ広範囲な技術的研究支援活動から得られた成果のみならず、研究・開発しようと思った動機や研究・開発途中に発生した困難をどのように克服してきたか、あるいは失敗例についても参加者全員で討論できるような技術にかかわる内容などを募集いたします。

また個別研修や全学研修の報告、定年を迎える方が技術職

第7回駒場キャンパス技術発表会実行委員会

員に伝えたいことや技術職員としての集大成、また若手技術職員の5年毎の仕事内容の見直し報告、あるいは再雇用熟練技術職員が今まで身につけた技術の公開等、職務上の技術問題に限定せず、技術職員等の能力向上に役立つものであれば、どのような分野でも歓迎いたします。

みなさまの積極的な応募をお待ちしております。ご応募は下記実行委員へお願いいたします。

募 集 要 項

開催日：2011年10月12日(水)

場 所：駒場コンベンションホール (An棟 2階)

応募資格：技術職員、教務系技術職員、助手、助教、事務職員等

発表形式：口頭発表(20~30分)、誌上発表、ポスター発表

応募〆切：2011年7月8日(金)

応募先：(基礎系部門)片桐 俊彦：内線57273 / (機械・生体系部門)小峰 久直：内線56204

(情報・エレクトロニクス系部門)長谷川 仁則：内線56242

(物質・環境系部門)木村 久雄：内線56821 / (人間・社会系部門)西川 功：内線58172

(試作工場)谷田貝悦男：内線58710 / (教養学部)石坂 彰：内線46063

(教養学部)吉田 薫：内線46060

実行委員長 高野 早苗 tel 03-5452-6344 tabo@iis.u-tokyo.ac.jp

PRESS RELEASE

生研関連新聞記事

以下の各紙に掲載された生産技術研究所の研究成果に関する記事について紹介しています。

詳細は、総務・広報チームにお問い合わせください。

・読売、朝日、毎日、日本経済、産経、日刊工業、日経産業

なお、その他の新聞に掲載されたものを本欄に記載することを希望される場合は、総務・広報チームへご相談ください。

最新記事	
●東大が省エネ教育棟 空調など3年で35%削減 [3/7 日経産業新聞(日経テレコン 21) 11面、日刊工業新聞 20面、 3/10 日刊工業新聞 22面]	【野城智也研究室】
●産業用ロボット改良の装置で3次元の細胞組織を自動形成 東京大学生産技術研究所のグループ [3/7 産経新聞 9面]	【竹内昌治研究室】
●東大が注射器型の装置 細胞の立体組織 思い通りの形に 再生医療に応用期待 [3/2 日本経済新聞 38面、日経産業新聞(日経テレコン 21) 6面]	【竹内昌治研究室】

掲載項目について『●』で始まる項目は記者会見、『・』で始まる項目は研究に関する掲載記事です。

CAMPUS TOUR

東京大学生産技術研究所を見学して

本校では4年前の開校以来、毎年1年生が東京合宿を実施し、企業や大学の見学を行っています。今年も前年に続き、生産技術研究所を見学させていただきました。松浦先生・川口先生・桜井先生の3研究室に伺い、先生方が取り組んでおられる高度な研究の内容を、中学生向けにわかりやすく、丁寧に教えていただきました。憧れの東京大学、しかも当日は見学風景の撮影もあると聞き、最初はやや緊張感でしたが、説明を聞いたり模型を使った体験をしたりするうちに当初の緊張も解け、興味を持って質問をした生徒もいました。見学後の感想文を読むと、日本の「最先端」に触

れる喜びを感じたと同時に、研究と日々の生活とのつながりを実感できたことがうかがえます。何より、説明して下さる先生がたの、専門分野に対する熱意が強く印象に残ったようです。

その他にも、キャンパス内の施設・設備に圧倒され、廊下に掲示されているパネルの内容に圧倒され…。今回の体験が良い刺激となって、普段の学習に向かう姿勢に変化が出てきてほしいと願っています。東京大学生産技術研究所の皆様、本当にありがとうございました。

(新潟県立直江津中等教育学校教諭 植木 聡)



• PROMENADE •

Stimulating Adventure: Miyazaki Prefecture

I would like to show my debt gratitude to my PhD study supervisor Associate Professor Dr. Daisuke Kitazawa and gratefulness to MEXT for providing me Japanese Government scholarship. Since the last two years in Japan, I have experienced an overwhelming amount of culture and traditions. From the beginning I am very happy to receive the outstanding support in both educational and cerebral from my supervisor, Marine Ecosystem Engineering Lab-IIS members, Systems Innovation departmental and the University of Tokyo administration office and also my living area Saitama ward and city office. I am really proud to study the University of Tokyo especially Graduate School of Engineering and IIS. First month in Tokyo, sometimes I lost subway train route. Only I could remember the name of some stations e.g. *Kotake-mukaihara, Komaba Todaimae, and Shakuji Koen*. When I troubled any language problem in University office, bank, post office, ward office, train station or market just I told that *Sumimasen, Watashi Wa Nihhongo Ga Wakarimachen*. A very polite and melody sound blew to me *Sumimasen, Chotto Matte Kudasai*. I observed after 2/3 minutes my problem has been solved. Actually I have no language to explain the outstanding systems in Japan. I have made a concept that Japan is the country of integrated 3 S and 3 P. Here 1st S=Systems, 2nd S=Security, 3rd S=Self-sufficiency and 1st P=Politeness, 2nd P=Personality and 3rd P= Punctuality.

Now as I write, my last two years stay in Japan is filled with plentiful memories. A unique experience that stimulated me the most was trip to Miyazaki Prefecture. I got an opportunity on November 2010 to visit Miyazaki prefecture with my *Sensei* for collecting aquaculture data in support of EIA. It was the first time amazing experience in my life to reside the immensity of ocean by small fishing boat. Before going

to ocean I felt very worry about ocean sickness although I took medication for the precaution. When the small boat was starting to go inside the ocean that time I was feeling very animated and worried about the high wave and strong wind. After completing the survey we took our dinner in Japanese traditional restaurant with delicious “*Sushi*” and “*Nabe*”. We started to go to another survey point in *Nobeoka*. My *Sensei* was driving his car from *Uchinoura* to *Nobeoka*. The sun was setting down. The radish and cloudy sky was going to drop in the mentor of the earth. The birds were backing to their nest. I was looking at the outside sightseeing. We were passing hilly meandering roads. I was surprised to see the many *ecoducts* for suitability of the wildlife. It is a wonderful planning for ecotourism both human being and wildlife sustainability. The government of Japan developed many roads and highways across the forest and mountain areas by preparing many *ecoducts*. These scenarios provide magnificent feelings by the Japanese people to the wildlife and forest environment conservation. Unfortunately, at this moment Japan is facing a natural trouble by March 11, 2011 a massive 9.0 magnitude earthquake and devastating tsunami in northeast Japan. We show our condolence to the tsunami affected peoples those who are died, lost their family members and houses. We are sorry to *Sakura* flowers that we can't celebrate you properly in this April, 2011. At this bad time we want to sing together the Charles Tindley's Lyrics: *We shall overcome, Oh! deep in my heart, I do believe, we shall overcome, we'll walk hand in hand, we are not alone, we are not afraid, we shall overcome these days.*

(海中工学国際研究センター 北澤研究室
博士課程 2年 Md. Nazrul Islam (Bangladesh))



On the way of my promenade in Pacific Ocean of Nobeoka point in Miyazaki Prefecture



FRONTIER

微生物の力を用いた次世代型地盤改良

都市基盤安全工学国際研究センター 准教授 桑野 玲子

軟弱な地盤を強化して使用するために、セメントや石灰、あるいは他の薬剤を地盤に注入して固化させる地盤改良を施すことがある。この地盤改良を、微生物の力を借りて行う方法が最近提案され、当研究室ではそれに関する基礎検討を行っている。地盤改良は、地盤の強度や剛性を向上させることが主な目的で行われるが、ライフラインなどの地中埋設物の埋戻し材に使われる土砂は再掘削する場合もあるので、ただ強くすればよいというわけではない。また、地盤改良は一般に高価なので、コスト管理の面からも、改良仕様や改良範囲の適切な設定および管理が求められる。

微生物の代謝により生成されるCO₂と土壤内に存在するカルシウムを用いて、炭酸カルシウムを析出させ、土粒子どうしをつなぐと共に土壤内の間隙をふさぐ、というのが地盤を固化させる理屈である。尿素分解菌を用いるのが効果的であることがわかっており、特に働きの良い菌（*Bacillus pasteurii*）も見つかっているが、できれば対象とする原位置の土壤にもともと生息する微生物を活性化して利用の方が生態系への影響が少ないので望ましい。微生物による改良体の強度は、実験室内ではセメント改良土に匹敵するような強さも発現可能であるが、実務に適用するには広範囲に弱い固化を施す方が得意分野であると考えられる。

何らかの原因で改良体が変形・損傷した場合でも、地盤内の有効微生物を再び活性化させ炭酸カルシウムの析出を促す環境を与えれば損傷個所が修復可能であると考え、微生物改良を施した砂供試体の三軸試験（円柱形の供試体の側方に一定圧力をかけたまま軸方向に力を加える要素試験）を実施した。その結果、せん断履歴（損

傷レベル）がそれほど大きくなければ供試体内の微生物の再活性化による強度・剛性の回復が可能であることが確認された。

まだ実用化までには解決すべき課題が多いが、微生物の力を借りた地盤改良技術は、液状化対策、土砂流出対策、植生などの表面被覆と併用した斜面の浸食防止、廃棄物処理地盤の敷土や覆土など、様々な使い道が考えられる。地盤沈下や地震などで一時的に改良体が損傷しても、微生物を再活性化させ内部から修復させるという新しい機能も期待できる。原位置の微生物を適切に活性化させることさえできれば、炭酸カルシウムの析出による地盤固化効果は遅くとも数日以内に出現し、広範囲の地盤を安価に改良することが可能と考えられる。変形追従性を有する次世代型地盤改良技術として発展を望み、開発への努力を続けている。

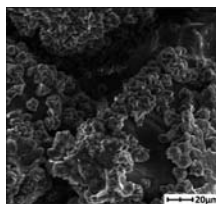


有効微生物
尿素
カルシウム源

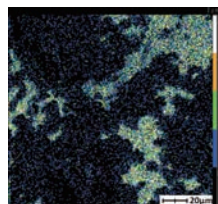
土粒子間に炭酸カルシウムが析出



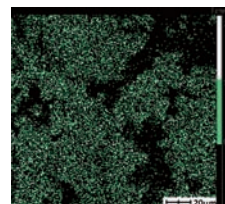
電子顕微鏡による表面観察



粒子表面



Si



Ca

編集後記

3月の震災以降、本所では報告会やセミナーなど、状況把握や今後の動向を議論するさまざまな集会が開かれました。本号でもその一部をご紹介させていただきましたが、やはり工学の殆どの領域をカバーする本所らしい、横断的、包括的な議論が特徴だったと思いま

す。被災地で今なお厳しい生活を送られる方々にお見舞いを申し上げつつ、今後の地域・街の安全に寄与できるような工学のあり方を、他分野の先生の知見もお聞きしつつ探していきたいと思えます。（太田 浩史）

広報委員会 生研ニュース部会

〒153-8505 東京都目黒区駒場4-6-1
東京大学生産技術研究所

☎(03)5452-6017 内線56017、56018

編集スタッフ

小倉 賢・清田 隆・北澤 大輔

高宮 真・太田 浩史・三井 伸子

E-mail: iisnews@iis.u-tokyo.ac.jp

生研ホームページ

http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/